



紀州ミカンと言えば、即座に紀文こと、紀伊國屋文左衛門とその名が出ます。ではその文左衛門とは、どんな人物だったのでしょうか。

江戸時代中期の江戸に拠点を置く豪商で、没年十六六歳といわれ紀文大尽とも呼ばれました。両親は不詳ながらも、紀伊国(現在の和歌山県有田郡湯浅町別所)の生まれと伝えられる彼は、一獲千金を夢見てミカンが不足する江戸へと暴風雨のなか紀州のミカンを経路に、江戸からは塩鮭を上方にもたらして巨利を得ます。その財を生かし、後に江戸八丁堀で材木商を営み、一六九八年(元禄一)の上野寛永寺根本中堂の造営に際して用材調達を一手に請け負い、更なる財を成したといわれる文左衛門。幕府の老中に接近、御用達商人として、その地位を確定したものの、その後の政權交代で家運は衰退したと言われもします。

紀州藩の江戸屋敷敷者が、お抱え講釈師に(紀州ミカンのPR)を依頼したことから始まり、(文左

衛門)紀州ミカン(ふいご祭り)を合わせ、文左衛門のミカン船物語の戯曲を作りました。講談・落語・読み物から、歌舞伎の演目となり、アメリカン・ドリームならぬ、お江戸サクセス・ストーリーは、江戸にとどまらず日本国内に広まり、不動の人気作品となりました。その後、その人物像はますます複雑怪奇となっていくきます。



紀伊國屋文左衛門肖像とされている

**火を扱う鍛冶職・金工職人・金物商たちがお祀りをする古き良き初冬の風物詩**

「火事と喧嘩は江戸の華」と言われるほど江戸は火事が多く、一度家に火が付くと家屋が密集した町は大火になりかねませんでした。それを守る火消しの働きぶりが華々しかったことから、華と

いう字を当てたと伝わります。火事が起こりませんように、と願う祭りが「ふいご祭り」で、江戸の町に欠かせない行事でした。今でもその風習は、全国の北前船寄港地だった港々に、いくつか残っています。

旧暦の十一月八日のふいご祭り。霜月と呼ばれ、冬至を迎えるこの月。この頃になると関東では越後山脈を越えて、北西の方から吹く風、「からつ風」が吹き荒れます。そこに火事が起これば一大事。火伏の意味も込めて、「鞆」を使い、火を扱う鍛冶職・金工職人・金物商たちがお祀りをします。土地によつては別名「踏鞆祭り」とも呼ばれ、古き良き初冬の風物詩なのです。

この日は仕事を休んで神社に「お参り」「金山彦命」「金山姫神」「稲荷神」の三神にお参りしてお札を頂き、作業場の神棚にお札とミカンと、地方によっては柿もお供えし、その後、その家の家長が屋根に上がり、火の恵みに感謝を申し上げながら、その力が荒ぶらないように祈念し、ミカンや柿を近所の人に縁起物として振舞い

ました。一説にはそれが、後に新築の餅投げに変化したのだとか、お正月のお年玉に変化したともいわれています。このお祭りに欠かせない重要なアイテムがミカンなのです。



お供えされるミカン

なぜ、ミカンだったのでしょうか…

鍛冶屋の神様、金屋子神が奥出雲に降り立ったその時に、犬に追われてミカンの木に登って難を逃れたという伝承とされていますが、その実は、まだ調査が進まず誰も解らないとのこと、金屋子神社宮司は言われます。



※参考&出典『日本の年中行事百科』(河出書房新社)／『江戸・東京下町の歳時記』(荒井修集英社新書)／『えと友第六八号「紀伊國屋文左衛門の実像」』(江戸東京博物館)／柳田國男全集



**千を越える場所で行われた大人気のお祭りでした**

江戸時代一六〇〇年代に入ると、江戸の町は人口が密集し始め、日本で最大の消費都市となりました。八百八町にある「ふいご祭り」を行う場所は、千を越えたと記録にあります。現在で言うコンビニと同じくらいの数になると聞きます。

撒かれるミカンも相当な数です。江戸時代に普及し始めた紀州ミカンが、江戸で最初に売られたのは一六三四年に水菓子問屋で、ミカン一籠半が一両(現在の貨幣価値に換算すると一三万円程)で売られたのが始まりとか。

駿河(現・静岡県)のミカンも江戸に入ってはいましたが、文左衛門の物語によるPR作戦が当たり、紀州ミカンのブランドの独

壇場となり、その価格が更に跳ね上がります。しかし時は流れ、幕末になると別のPR作戦によって、紀州のミカンは、そのブランド性を失ってしまうことになるのです。

ふいご祭りは現在も厳かに行われています。よく似た祭りでは、神奈川県逗子市で、毎年一月二日に八大龍王社の祭事のひとつ「小坪みかん投げ」なる祭が行われます。豊漁と海上での安全を祈り小坪漁港の漁船から投げ、多くの人に振る舞います。

群馬県重要無形民俗文化財に指定の、群馬県吾妻郡中之条町の「鳥追い祭り」でも、ミカン投げが大切な行事として伝わっています。

通称「おみかんやき」。香川県東かがわ市の「白鳥神社」では、古い神具などを焼く十二月の「お火焚祭」で、ミカンを焼くことで知られています。神事とミカンそして柑橘。訪ね歩く旅はまだ終わりにそうありません。

次回「何故、紀州ミカンから温州ミカンへと市場が変わったのか」・・・に続く。